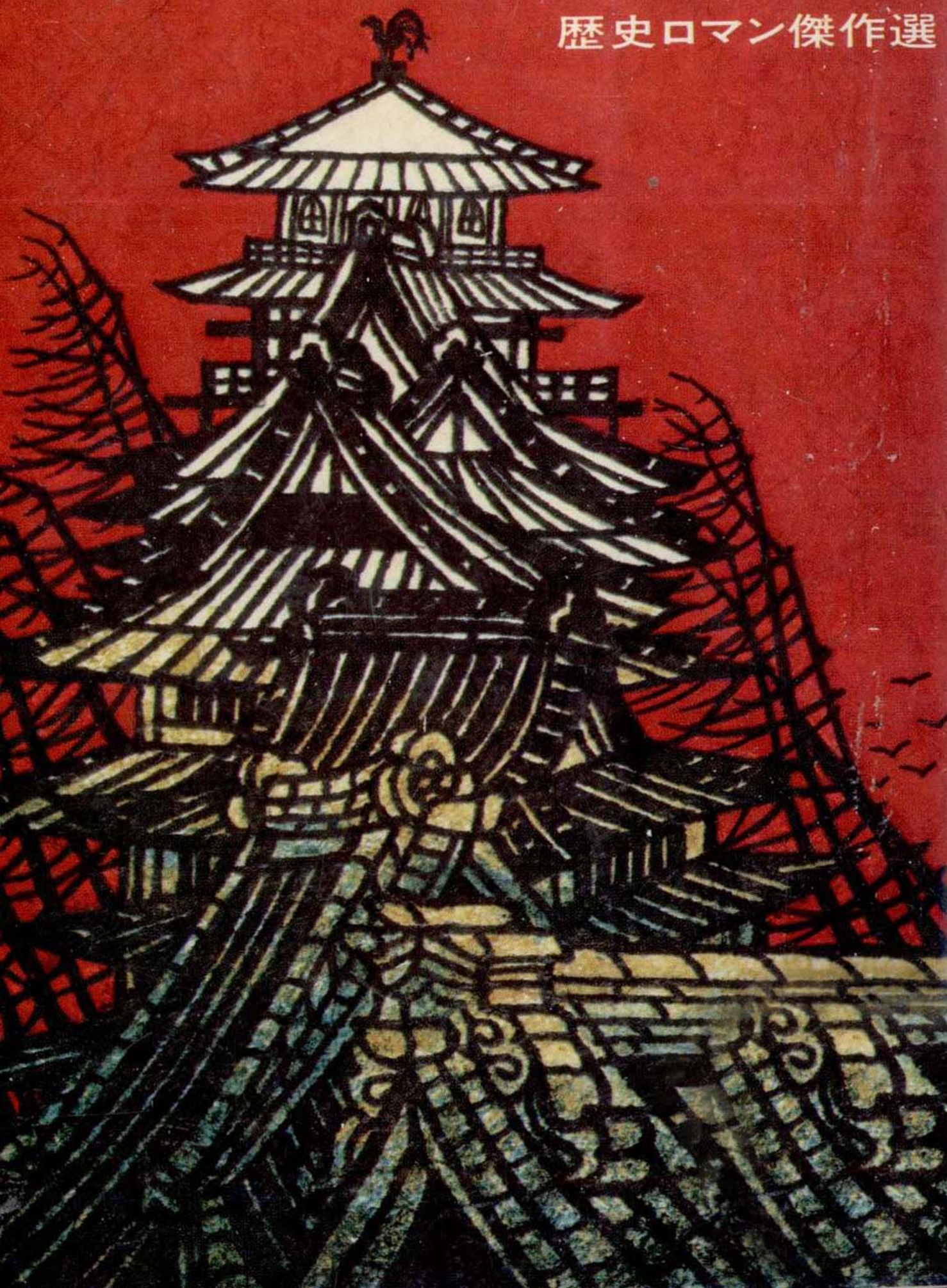
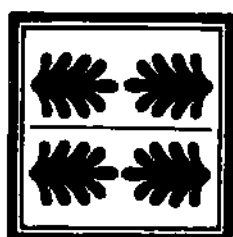


# 侍たちの風雪

歴史ロマン傑作選





講談社文庫

侍たちの風雪 歴史ロマン傑作選  
日本文芸家協会編

昭和51年4月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国オフセット株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 有限会社千曲堂

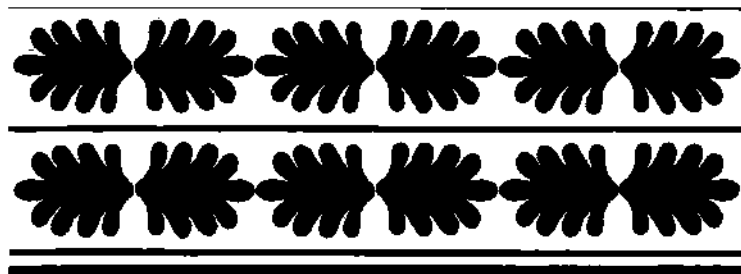
© Nippon Bungeika Kyokai 1976

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

# 侍たちの風雪



日本文芸家協会編

講談社

〈編集委員〉

伊藤桂一

尾崎秀樹

武蔵野次郎

## 目次

おさん

山本周五郎 七

同門の宴

池波正太郎 六〇

平将門

海音寺潮五郎 八四

非情なる事情

山手樹一郎 一二三

赤毛の司天台

新田次郎 一五〇

天流斃る

早乙女 貢 一七七

西鶴置きみやげ

杉本苑子 二〇六

辻のわらじ

戸板康二 二二七

此ノ件嚴秘ノ事

村上元三 二六三

妖胎記

山田風太郎 二九三

美濃浪人

司馬遼太郎 三三五

解説

武蔵野次郎 三七二

まえがき

村上元三

日本文芸家協会の編纂物の一つとして、「代表作時代小説」の第一集が出版されたのは、昭和三十年で、昭和五十年まで二十一冊を数える。編纂委員も、海音寺潮五郎、尾崎士郎、富田常雄、川口松太郎、土師清二、萱原宏一、十返肇、吉田健一、和田芳恵、山岡莊八の各氏に、それぞれ交代の形で当ってもらった。協会理事として、言い出しつぺなので、第一集から筆者が編纂委員の一員をつとめ、昭和三十七年度以降、武蔵野次郎、尾崎秀樹の二氏にも常任の形で毎年、編纂にたずさわってもらっている。協会の出版物としては、毎年黒字で、出版元の東京文芸社に、バックナンバーを揃えてくれ、という注文が絶えないという。

第一集から第二十一集までの掲載作品、作家の顔ぶれなどを見ると、いろいろ感慨深いものがある。巻を重ねるに従って、時代小説の流れというものが示され、後年、貴重な資料になるだろうと思う。

こんど講談社から、これまで刊行された二十一集、収録作品四百七十数篇の中から選んで、文庫六冊として出版することになった。編纂は、尾崎秀樹氏、武蔵野次郎氏、伊藤桂一氏にお骨折りを願った。およそ二十年間の、時代小説短篇の集大成という意味でも、この文庫六冊の刊行は意義が深い。

昭和五十一年三月

# 侍たちの風雪

歴史ロマン傑作選



## おさん

山本周五郎

明治三十六年生れ、正則英語学校卒業。新聞記者、雑誌記者をへて文筆生活に入る。「樅ノ木は残った」「ながい坂」等の史伝的な長編の他、「赤ひげ診療譚」をはじめ江戸庶民の喜怒哀楽をつづった長短編がある。昭和四十二年死去。全三十八巻の全集を残した。

## 一の一

これ本当のことなの、本当にこうなっているの、とおさんが言った。それは二人が初めてそうになったときのことだ。そして、これが本当ならあした死んでも本望だわ、とも言った。言葉にすればありきたりで、いまさらという感じのものだろうが、そのときおさんは全身で哀れなほどふるえてい、歯と歯の触れあう音がしていた。世間にはありふれていることではあっても、それは人間が一生にいちど初めて口にする、しんじつで混りけのない言葉であった。おれはごく平凡な人間だった。職人の中でも「床の間大工」といわれ、床柱とか欄間、または看板とか飾り板など

に細工彫りをするのが職で、大茂の参太といえは相当に知られた名だと、うぬぼれていた。行状だってちっとも自慢することはない、素人の娘、ひとのかみさん、なか（新吉原）には馴染もいたし品川も知っている、酔ったときにはけころと寝たこともあるくらいで、ただ、しんそこ惚れた相手がなかった、というのが取り得といえはいえたかもしれない。としは二十四、仕事が面白くなりだしたときだから、女のことなどはどっちでもよかった。おさんは大茂の帳場で中どんを勤めていた。吉原の若い衆の呼び名のようにあるが、「中ばたらき」というくらいの意味だろう、いってみれば奥と職人とをかけもちで、茶をはこんだり、弁当の世話をするくらいで、それほど親しく知りあつてはいなかった。あとで聞くと、おさんのほうではまえからおれのことを好きで、自分の気持を知ってもらいたいために、いろいろじつをつくしたということだ。そう言われどもおれにはなにも思ひだせなかった。ちよつときれいな女だな、くらいなことは思つたろうが、自分が好かれてゐるなどということはまったく気がつかなかった。それが十月十日の晩、ひよつとしたでき心でそうなつてしまったのだ。その夜は親方の家で祝いがあつた。親方とおかみさんが夫婦になつてから、ちようど十二年めに男の子が生れ、お七夜に親類や組合なかまや、町内の旦那たちや、大茂から出た棟梁たちが招かれた。派手なことの嫌いな親方だが、よっぽどうれしかったんだろう、おれたちはじめ追ひ廻しの者にまで、八百政の膳が配られ、酒が付けられた。おれはなかまでも酒に強いほうだから、いい氣になつて飲んでゐるうちに酔いつぶれてしまい、眼がさめてみると側におさんがいた。おれが手を伸ばすと、おさんの軀はなんの抵抗もなくおれの上へ倒れかかつてきた。そしてあれが起こつたのだ、おれが抱き緊めて、まだそれ以上にををするつもりもなかったとき、おさんの軀の芯のほうで音がした。音とはいえないかもし

れない、水を飲むときに喉がごくつという、音とも波動ともわがちがたい音。抱き緊めているおれの手、それがはつきり感じられたのだ。おれはそれで夢中になった。おどろくほどしなやかで柔らかく、こっちの思うままに撓ううぶな軀の芯で、そんなに強く反応するものがある、ということがある。これが夢中にしてしまったらしい。そして、終ったとも思えないうちにおさんが言ったのだ。これ本当のことなの、本当にこうなってしまうていいの。全身でふるえ、力いっぱいしみつきながら……。

## 二の一

行燈がまたたいた。油が少なくなったのだろう、行燈が生き物のように、明るく暗くまたたきをし、油皿で油の焦げる音がした。参太はたとう紙の上に並べた小判や小粒をみまもっていたが、油の焦げる匂いに気づいて振返り、手を伸ばして行燈を引きよせた。燈芯のぐあい直し、油を注ぎ足すと、行燈は眼をさましたように明るくなった。

「二十三両」彼は向き直って、そこにある金を見やった、「二十三両と三分二朱か」

階段を登る足音が聞えた。参太はたとう紙の一方を折って、並べてある金を隠した。あがって来た足音は廊下をこっちへ近づいたが、そのまま通り過ぎていった。参太は胴巻と、革の財布と巾着を取り、二十両を胴巻へ入れてるめ、三両二分を財布、残りを巾着へ入れた。そうして胴巻は枕の下、財布は両掛の中、巾着を枕許へと片づけてから、太息をついて火鉢の鉄瓶を取ろうとした。鉄瓶は冷たかった。彼は鉄瓶に触れてみてから、火箸を取って火をしらべた。火は立ち消えになって、白い灰をかぶった炭だけしかなかった。

「茶が欲しいな」と彼は火箸から手を放して呟いた、「——来るのか来ないのか、すっぱかしだとすると、いまのうちに茶を貰っておくほうがいいかな」

廊下を足音が戻って来て、停った。

「起きてて」と障子の外で女の囁く声がした、「もうすぐだから待っててね」

「茶が欲しいな」

「あら」と言つて障子をあげ、女が覗いた、「そこにあるでしょ」

「水になっちゃった、火が消えちゃってるんだ」

「持つて来るわ」女は媚びた表情で頬笑みかけた、「寝ないでね」

参太は膝の上の手をちよつと動かした。女は障子を閉めて去った。

彼はちよつと迷つてから、ふところ紙を一枚取つてひろげ、巾着の中から小粒を一つ出して包んだ。それを敷布団の下へ入れ、掛け夜具を捲つて横になった。火鉢の火が消えていると知つてから、夜気の寒いことに気がついたのだ。夜具を顎のところまで引きよせて、参太は天井を見まもつた。雨漏りの跡のある煤けた天井で、行燈の光りがその一部分をぼつと明るく染めていた。

——二つ三つはなれた座敷で、笑い声が聞えた。夕方に来た四五人伴れの客である。この土地の者で、なにかの寄合の崩れだとか言つたが、みんな酔つていて、ばかな声で代る代る唄をうたつていた。一刻ばかりまえから静かになり、帰つたのかと思うと、ときどき笑い声が聞えて来る。

参太はすぐに「やつているな」と直感した。どうせ友達同士の一文博奕だろう、こっちは鉄火場にも出入りするからであるが、他人のこととなると、たとえ一文博奕でも背筋へ風がはいらうな、不安な、おちつかない気分におそわれるのであつた。

参太は眼をつむった。向うの座敷がまたしんとなり、眼の裏におさんの姿がうかんできた。顔かたちはどうしても思いだせないが、ぜんたいの姿と、そのときどきの身振り、泣き声や叫び声、訴えかける言葉などは、つい昨日のもののように鮮やかに、はつきりと記憶からよみがえってきた。

彼はびくつとして眼をあいた。障子を忍びやかにあけて、女がはいって来たのだ。女は派手な色の寝衣に、しごきを前で結び、髪の毛を解いていた。

「おおさぶい」女は火のはいった十能を持って、素足で火鉢へ近よった。「このうちのおかみさんがやかましいの、ゆうべのこと勘づいたらしいのよ」

「むりなまねをするなよ」

「来ちゃあいけなかったかしら」

「むりをするなつて言うんだ」

「むりは承知のうえよ」女は火鉢へ火を移し、炭を加えてから鉄瓶を掛けた、「あたしこんなうちにみれんなんかないんだから」

「おれは明日ここを立つんだぜ」

「思つたとおりね」

「なにが」と参太は女を見た。

「あんたが立つことよ」女はしごきを解いてから行燈を消し、こっちへ来て、参太の横へすべり込んだ、「——冷たくつてごめんなさい、ねえ、あたしお願いがあるの」

「断わっておくがおれは女房持ちだぜ」

「おかみさんにしてくれなんてんじゃないの」と言つて女は含み笑いをした、「——ちよつとのもこうさせてね、すぐにあつたまるから、あたしの軀つてあつたかいのよ」

## 一の二

あたしおかみさんにして貰おうなんて思わないのよ、とおさんは言つた。夫婦になろうと言いだしたのはおれのほうだ、あとでわかつたのだが、おさんには親許で約束した男があり、その年が明けると祝言をする筈になっていた。おれは知らなかつたからおさんを説き伏せたうえ、親方の許しを得て世帯を持った。牛込さかな町の喜平店といい、路地の奥ではあつたが戸建ての家で、うしろが円法寺という小さな寺の土塀になっていた。まだとしも若いし、かよいの職人で戸建ての家は贅沢だが、おれにはそのほうがいいという勘があつたし、二十日と経たないうちに、自分の勘の當つていたことがわかつた。それはそもその初めから、つまり、初めておさんを抱いたときからわかつていた、と言うほうが本當だろう。おれを夢中にさせたおさんのからだは、いっしょになるとすぐに、この世のものとも思えないほど深く、そして激しくおれを酔わせた。誰でもこんなふうになるの、恥かしい、どうしてあんなになるのかしら、女つていやだわ、とおさんが言つた。それは自分で気がついたからだ、誰でもというわけじゃない、おまえのからだがそう生まれついたんだ、とおれは言つてやつた。たいがいの者がそれほどには感じないんだ、そういうからだはごく稀にしかないし、そう生んでくれた親を有難いと思わなければいけないだ。いやだわ、恥かしい、あたし自分がいやになつたわ、とおさんは言つた。夫婦ぐらしもいちおうおちつき、氣持にゆとりもできてからだ。ふしぎなことに、恥かしいと口ぐせのように

言いだしてからあと、却ってそれが激しくなった。おさんの軀には、ぜんたいに目のこまかな神経の網がひそんでいた。その網の目は極微にこまかく、異常に敏感であつた。軀のどんな部分でも、たとえば手指の尖端にでも、そういう気持でちよつと触れば、すぐ全身に伝わって、こまかな神経の網目に波動と攣縮が起こり、それが眼の色や呼吸や、筋肉の収斂や、肢指や脊椎の屈伸に強くあらわれた。まったく意識しないものであり、いちど始まるとおさん自身にも止めることができなかった。正月になり二月になつた。おれは一戸建ての家を借りてよかつた、つくづく思つたものだ。隣りが壁ひとえでもあつたら、朝晩の挨拶にも困つたことだろう。幸いうしろは寺の土塀だし、長屋とは六七間もはなれてゐた。近所の者には氣づかれずに済んだが、辰造は勘のいいやつで、そのうえ道楽者だから女には眼が肥えていたようだが、或るとき普請場でずけりと言やあがつた。ひるの弁当のあとだ。まわりにはだいたい職人がいて、辰造の言うことを聞いて笑つた。意味をよくのみこめない笑いだ、おれはかつとなつて辰造を殴りつけた。怒りではなかつた。言われた言葉に怒つたのではない、自分だけしか知らないおさんのからだの秘密を、辰造に勘づかれていたといふことの嫉妬だつた。冗談だよ、氣に障つたら勘弁してくれ、と辰造はすぐにあやまつた。ひとの女房のことなんかに氣をまわすな、とおれは言つてやつたが、凶星をさされた恥かしさは隠しきれなかつた。辰造はまたあやまつたが、その眼は笑つてゐた。

## 二の二

「お湯が沸いたわ」と女が言つた、「お茶を淹れましようね」  
参太は黙つたままで手を放した。

「こら、この汗」衿を合せながら起き直った女は、衿をひろげ、小さいけれどもこりつと緊った、双の乳房のあいだを撫でた、「ごらんなさい、こんなよ」

「風邪をひくぜ」と参太が言った。

女は夜具の中からぬけ出し、しごきをしめて火鉢のほうへいった。行燈は消したままだが、すぐ近くにある廊下あかりで、茶を淹れるぐらいのことに不自由はなかった。あんな女房持ちだなんて嘘でしょ、と女が手を動かしながら言った。女房持ちだよ、と参太が答えた。嘘よ、独り身とおかみさんのある人とはすぐにわかるわ、あたし昨日からちゃんと見ていたの、顔を洗うとき、ごはんを喰べるとき、茶を飲むとき、それから寝るときもね、おかみさんのある人はやりっ放しだし、なんでも人にやらせようとするけれど、あんたは自分できちんともするし、手順もなめらかだわ、それは身のまわりのことを自分でする癖のついている証拠よ、と女が言った。参太は眠そうな声で、欠伸をしながら言い返した。自分のうちにいるときと旅とは誰だって違っただろう。女は茶道具を持ってこっちへ来、枕許へ置いて、自分は夜具の上へ坐って茶を淹れた。

「どうしてそんなにおかみさんのあるふりをするの」と女が言った、「——はい、お茶」

参太はだるそうに腹這いになり、女の手から湯呑を受取って、ゆっくりと茶を啜った。

「なにか女で懲りたことでもあるの」

「おだてるな」と参太が言った、「そんなにもてる柄じゃねえや」

「昔のことだけれど、あたし金さんって人を知ってたわ」と言いかけて、女は急にかぶりを振った、「ばかねえ、どうしてこんなことを言い出したのかしら、——ねえ、お願いがあるのよ」

「女房持ちだって断わっておいたぜ」

「そんなことじゃないの、いっしょに江戸まで伴れてってもらいたいのよ」

参太は振向いて女を見た。

「迷惑はかけないわ」と女は言った、「自分の入費は自分で払うし、江戸へ着いたらすぐに別れるつもりよ、ねえ、お願い、道中だけおかみさんってことにして伴れて行ってちょうだいな」

「昨日はじめて会ったばかりだぜ」

「晩にどうして」女は眼に媚びをみせた、「いくらこんな旅籠宿の女中をしていたって、誰の言うことでもきくような女じゃあないわ、それともあんたにはそんな女にみえたの」

「どんな女ともみななかった、ただ、決して後悔はしないだろうと思ったな」

「させなかったつもりよ、そうでしょ」

「もう一杯もらおう」と参太は湯呑を女に渡した、「——どうして江戸へゆくんだ」

「田舎がいやになったの」

「帰る家はあるのか」

「友達が両国の近くにいるわ、料理茶屋に勤めているの」と女が言った、「まだ生きていればだけれど」

「生きていたって、女は身の上が変りやすいもんだぜ」

「その代り食いっぱぐれもないものよ」茶を淹れて参太に渡しながら、女は言った、「いいでしょ、伴れてってくれるわね」

「明日は早立ちだぜ」